

広がりを見せる青少年交流事業— 学校訪問で全国にまかれた交流の種が、芽を出しています。

学校訪問がきっかけとなり、日本と韓国の学校間での交流に発展することも少なくありません。今号では、交流の事例について、交流を行っている3校の学校関係者にインタビューを行いました。

● 神奈川県立弥栄(やえい)高等学校と東灘(トントン)中央高等学校の交流

インタビュー回答者 弥栄高校 坂本 万里校長
同校国際科2年 渡邊 琳さん

【姉妹校交流の開始】

2016年秋、東灘中央高校側が神奈川県内の学校との姉妹校交流を希望しているとの話しが(公財)国際文化フォーラムを通じてあり、両校の間で姉妹校交流に関する内容が検討されました。2017年10月に日韓文化交流基金の企画競争公募事業にあわせて実施された韓国高等学校校長訪問団一行が弥栄高校を訪れましたが、団員として東灘中央高校のチェ・スンホ校長も来日しており、両校の間で、「教育交流関係の成立に関する協定書」が結ばれ、正式に姉妹校交流が始まりました。

実際の交流は、東灘中央高生10名が昨年10月に5日間の日程で来日し、学校生活体験やホームステイを行いました。さらに今年の3月下旬には、弥栄高生10名が5日間の日程で東灘中央高を訪れ、交流を行う予定です。

【前任校2か所でも姉妹校締結を実現。締結のカギは3拍子】

弥栄高校に校長として赴任する前の前任校2か所においても、国際理解教育に重点を置いており、それぞれ韓国の高校との間で姉妹校締結を実現しました。姉妹校締結に至るためのポイントは、「校長、教員、生徒の三者の足並みがきちんと揃うこと」であると思います。姉妹校交流を続けていくのは、大変なこともあります。弥栄高校の国際理解教育に期待して本校に入学してくる生徒もいるので、弥栄西高校の時代から30年以上続く伝統をこれからも大切にしていきたいです。

弥栄高校は国際科の他にも、芸術科や理数科など専門学科が設けられているのが特徴で、これまでも「アジア国際子ども映画祭参

加訪日団」として韓国の高校生が学校を訪れ、芸術科映像専攻の授業に参加して交流を図ったりした他、教育現場視察を目的とした韓国教員訪日団の皆さんが視察に訪れました。

【韓国訪問に向けて】

3月下旬の訪韓に参加する渡邊琳さん(国際科2年)は、「韓国の人たちはとてもフレンドリーで、韓国文化にも触れられるのが楽しみです。弥栄高校のことをもっと知ってもらいたいので、学校紹介のビデオ映像に韓国語の説明をつけて一生懸命に準備しています」と元気に語ってくれました。



3月の韓国訪問に参加する弥栄高生たち。写真右から2番目が渡邊さん。

● 山形県・羽黒(はぐろ)高等学校と郷一(ヒャンイル)高等学校の交流

インタビュー回答者：羽黒高校 英語科教諭 粕谷優美子 さん

【教員訪韓団で訪問した高校でのこと】

2017年9月、全国から集まった小中高教員14名で構成される教員訪韓団の一員として韓国を訪問しました。日程中に京畿道華城市にある郷一高校を視察のため訪問した際、郷一高校が姉妹校として交流できる学校を探しているとの話を聞きました。私の勤務先の学校でも、日本と時差の少ない国の高校と新たな姉妹校提携を考えていたこともあり、韓国滞在中から郷一高校の日本語教員と連絡を取り合い、両校で交流をしていく約束をしました。

【交流ツールとしてインターネット電話・スカイプを利用】

訪韓団からの帰国後、実際の交流の手段を検討する中で、以前アメリカの学校とインターネット電話サービスのスカイプを利用して交流をした経験もあったことから、今回もスカイプを使って交流することになりました。校内のパソコンを使い、羽黒高校からは英会話部の生徒、郷一高校は日本語履修の生徒とで交流が始まりました。

昨年10月下旬に、第1回目の交流が行われ、当初は教員同士によるスカイプの動作状況のテストのみの予定でしたが、両校とも興味を持った生徒たちが集まったため、お互いに簡単な自己紹介をし

て交流がスタートしました。

11月上旬には第2回目の交流が行われてからは、SNS上でのIDなどを交換しお互いに写真を見たり、メッセージを送り合うなどの個別の交流も始まりました。12月中旬の第3回目は「韓国の食文化」をテーマに、郷一高校の生徒たちが日本語で好きな韓国料理を紹介してくれました。羽黒高校の生徒たちも好きな食べ物を紹介した他、クリスマスの過ごし方や、クリスマスに特別に食べる物があるのかなども話しました。

【交流に参加した生徒の関心は英語圏から韓国へ】

羽黒高校では、英語圏に興味がある生徒が多かったのですが、交流を通して、韓国の同年代と触れ合うことで、韓国をより身近に感じ、韓国語を学び始める生徒も見られるようになりました。また、郷一高校の生徒の日本語のレベルも高く、日本の大学についても調べ、日本の学校への進学や留学を志している生徒もいることにも驚かされました。

交流に参加した生徒たちはSNS上で繋がり、一対一でスカイプよりも深い話ができて、日本との共通点や相違点を知ることができたようです。同年代同士で実際に交流し、話すことにより多くのものを得

ているように感じました。

今回の交流は本校の英会話部のみでしたが、時間を合わせて国際コースの授業での交流も考えていきたいです。そして、将来的には交換留学プログラムも視野に入れていきたいと思います。



スカイプを使って郷一高の生徒とのやりとりをする羽黒高生たち

● 熊本県立宇土(うと)高等学校と盆唐(ブンダン)中央高等学校の交流

インタビュー回答者：宇土高校 研究開発部長 教諭 梶尾滝宏 さん

【理系人材育成の視点での連携を目指して】

交流を考えたいきっかけは、2014年2月に日韓文化交流基金主催の韓国高校生訪日団一行が本校を訪れたことです。訪日団の引率として来日していた教育関係者に交流について相談したところ、理系分野の人材育成の視点で連携をお願いできそうな学校として京畿道にある盆唐中央高校を紹介していただきました。

本校では2012年に学校独自のプログラムとして、グローバルリーダー育成プロジェクト (GLP) を立ち上げました。さらに、2013年度に文部科学省からスーパーサイエンスハイスクール (SSH) の指定を受けたこともあり、一気にグローバルリーダー育成と科学技術人材育成を強く押し進めることになり、その中で海外と連携できる高校や大学を模索していたところでした。

【困難を乗り越えて】

2014年4月当初にメールで盆唐中央高校に連絡を取り、連携をすすめていくための話し合いをもつ予定でしたが、韓国でセウォル号の沈没事故があり、哀悼の意を込めて見送ることとなりました。2015年4月に再度連絡したところ、盆唐中央高校には課題研究発表会があることを知り、同年10月下旬に開催される発表会に宇土高校のSSコースの生徒6名が参加して、江戸時代から宇土の人々を潤してきた轟泉 (ごうせん) 水道をテーマに研究した内容や音の響きによる超常現象、反発係数などを取り上げた研究を英語で発表しました。

発表会までの準備期間には、盆唐中央高校とテレビ会議システムを利用して情報交換しながら、現地の高校生と英語で研究内容について意見交換しました。発表会から帰国した後もテレビ会議を通じて交流も行い、単年で終わらずその後も続けて両校で連携していくことになりました。

2016年度も同様の日程、人数で参加し、両校の交流はさらに深まりました。宇土高校でも人気の高い交流プログラムとなり、2017年度も前年と同規模の10名で実施する計画を進めていました。しか

し東アジア地域をめぐる世界情勢の不安から、残念ながら今年度は中止となってしまいました。

【これからも学校独自のプログラムとして】

開始当初は、交流と簡単にいっても、何をすれば深まるのか、どうしたらよいか、不安もありましたが、お互いに研究発表できる材料があるということで、一気に生徒同士も仲良くなったような気がします。交流参加した女子生徒 (2年) は、「韓国の生徒の積極性とパワフルさが一番印象に残りました。一人ひとりが自分の発言に自信を持っていて、鋭い質問にも自分が答えたいとマイクを取り合うほどでした」と興奮気味に話してくれました。最近では、理系コースの生徒だけでなく、文系の生徒も応募してくれるようになり、本校にとっても貴重な機会と捉えています。実施については様々な意見がありますが、生徒が韓国に行って発表したいという背中を後押ししてくれる保護者も増えているのも事実です。



盆唐中央高校の授業に参加して一緒に実験を行いながら交流する宇土高生 (写真中央の女子生徒)